

（寄稿）

NOMURA

介護記録の電子化 ～失敗しないためにすべきこと～

人材不足と職員の高齢化が深刻化するなか、少しでも労働環境の改善を図るために、システム化を検討する介護事業者も多いのではないだろうか。また、社会福祉法人においては、収益事業の余剰金の使い道として、システム化を検討する動きも多いと思われる。何れにせよ、業務の効率化にシステム化が期待されていることには変わりはない。

ところが、業務の効率化を目的にシステム化を検討したものの、年齢の高い職員や、パソコンに慣れない職員も多いため、実際に入力は誰が行うのか、入力業務が負担になるのではないかと、という壁に当たり、システム化を躊躇し、検討が進まないケースも見られる。

今回のヘルスケアノートで紹介する事例は、特別養護老人ホーム福智園でのシステムの活用事例である。当施設はこれらの壁を乗り越え、職員が自ら入力したいというモチベーションを醸成することができ、更なるデータ活用へ発展させている。当施設によると、システム化の重要なポイントは、入力した結果が、入力した職員自身の役に立つような仕組みであることが必要という。

つまり、無駄な入力は極力排除し、活用する必要のない情報は、従来どおり紙で運用の方が効率的な場合もあるので、無理なシステム化は、かえって業務の効率を妨げることになってしまうという。この点を踏まえると、既存のシステムは、多くの機能が備わっていることも多いが、導入の検討の際は、実際の情報の活用イメージを十分に検討することが必要となる。実際、福智園のなかでは、データが入力されたことにより、事故防止策など電子記録に基づいた議論が活発化している。そのなかで、さらに「このようなデータも入力すれば介護の質が上がるのではないか」というアイデアも職員から飛び出している。

本稿は、社会福祉法人福智会 特別顧問 吉岡 由宇氏に寄稿いただき、現場職員による入力が自らの業務に役立ち、入力業務に対するモチベーションが高まるというシステムとそのデータ活用について、ご紹介いただいた。

本稿のなかでは、施設におけるシステム化の際に陥りやすい、データ入力の手間による疲弊を防ぐためには、どのような点に着眼し、どのようにシステム化するかを具体的な活用例を紹介しながら説明いただいている。

今後、具体的にシステム導入を考えておられる事業者の方は、一度、本稿に目を通していただくことをお勧めする。

（市川）

2018年9月18日

Healthcare note

（No. 18-09）

寄稿者名：
社会福祉法人福智会
特別顧問
吉岡 由宇

編集主幹：
野村ヘルスケア・
サポート&アドバイザー
市川 剛志

野村證券株式会社
金融公共公益法人部